

# 美作國誕生寺の傳説

石橋 誠道

たゞ名を聞くだに非常に慕はしく思はる、はかの美作の誕生寺である。そはわが宗祖法然上人が降誕あそばされた聖地だからである。予は二度までもかの聖地に參詣したが、いつもなんごなく一種いふべからざる懐かしさを覺えて、去るに忍びないやうな心地がした。

これは上人の御降誕の時に二旗のか、つた椽の木である。此處は定明が創傷を洗つた片目川である。これは法然上人の御兩親の御廟であるなき、聞かざる、ご、全く七百有餘年の昔の事ごも思はれず、つい先頃にでもあつたかのやうに此處は勢至丸様が幼い時に、遊び戯れ遊ばした野らであらう、彼處は上人が登り給ふた小山であらうなき、無限の想像ご感慨ごに打たれざるを得なかつた。されば出來得る限りこの美作の誕生寺や、その附近の上人に關する事跡を細かに取り調べたいご思つたが、いかにせん七百有餘年の春秋は、漸く事情を湮滅し、特に誕生寺は中古火災兵難等の爲に全く史料が失はれて今委しく知るごの出來ないのは誠に残念なごである。然しながら今知り得る限りを盡して、ご、に記したいご思ふ。

## 久米南條の沿革

上人御降誕の地は久米南條稻岡庄であるが、そもこの久米の起源は、元明天皇の和銅六年に、備前の國の中の六郡（久米、英多、勝田、苦田、大庭、眞島）を割いて、美作國を置かれた時の一郡の名稱そのまゝである、所がその後清和天皇の貞觀年中に久米郡を分つて久米南條ご久米北條ごの一郡ごされた。そののち後西院天

皇の寛文元年に美作の國主森長繼が之を改めて久米南郡、久米北郡と稱ふるに至つた。稻岡庄といふのは、庄は庄園であつて、王朝時代以後、勢力のある寺社、及び各個人の私有地でも庄號のある土地をいふのである。所が和銅六年に美作國が備前國から分れた際には、久米、錦織、大井、倭文、賀美(賀茂)、長岡、弓削の七郷であつたが、其後久米、大井、倭文、弓削の五郷は庄となり、錦織は錦織と打穴の二郷に分れ、賀美(賀茂)は坪和郷と稻岡庄とに分裂し、稻岡庄は更に稻岡南庄と稻岡北庄と葛虫庄(保延五年に原田庄と改む)とに別れた。又長岡庄は長岡庄と佐良庄とに分れた。其後幾多の變遷を経て明治元年の頃は稻岡庄が分裂して十六ヶ村となつた。(久米郡誌)

### 漆氏及び秦氏の系統

法然上人の父時國公の系圖を考へてみるに、仁明天皇の皇子に、西三條右大臣源光公といふ人があつたが、その後胤に式部太郎源の年といふ人があつた。所がこの人は陽明門に於て藏人兼高を殺した罪によつて美作國に配流された。然るにこの國の久米の押領使神戸の大夫漆元國の娘を娶つて男子を擧げた。所が元國には男子がなかつたから、かの外孫を自分の子としてその跡を繼がしめたと同時に、源の姓を改めて漆盛行と稱へた。この盛行の子が重俊、重俊の子が國弘、國弘の父子時國である。所がこの漆家は美作の國では三貴家の一に數へらるゝもので、即ち一に海氏、二に漆氏、三に菅原氏である。國人は之を三家の君達と稱へた。漆氏は斯うした名門であつたので、時國公が常に本姓に慢心をもつてゐられたのもまた無理のないことである。

次に秦氏の系統を探つてみるに、神功皇后征韓の後、應神天皇の御宇十四年に、秦の始皇帝の第三世孝武王は、亂を避けて朝鮮に來たが、その裔功滿王の子、融通王(弓月の君)は、百二十七縣の民を率ゐて我國に歸化した。その四月には百濟から裁縫に巧であつた女眞津を獻じ、その二十年には漢の靈帝の裔なる阿知使主がその子都加使主と共に十七縣の民を率ゐてまた歸化したのである。斯る新來の人々によつて我國の文化は一新紀元を劃するに至つた。而してこの融通王の率ゐるた民族が即ち錦織部である。この民族は養蠶並に機業が頗る堪能であつたので仁德天皇の御代に機織(はたのいひ)(秦忌

寸<sup>す</sup>の姓を賜ひ、又阿知使主が率ゐる漢民もまたこの術に優秀であつたから綾錦の姓を賜はつた。かくて天皇は此等の人々を諸國に配置して養蠶絹織を獎勵し給ふた、この時秦氏の一族は錦織部の長となり部民を率ゐる久米郡に至り盛んに養蠶機業に努力した、今久米郡の三保村にある錦織神社はこの秦氏の祖先を祀つたものであると傳へられてある

又三代實錄に依るに清和天皇の貞觀七年十一月三日、美作國久米郡の人、秦豐永は天性孝行にして志敬順に在り、幼稚の年二親を養ふことを致す、父母亡して後常に墳墓を守る、位を三階に叙し、課役を免し門閭に表して衆庶をして知らしむと記されてあるから、秦氏はこの國に於ても相當に名望があつたものと思はる。又弓削町にも波多神社といふがあるが、これも秦氏の祖先を祀つたものであらうといはれてある。(久米郡誌、作陽誌、三代實錄、勅傳翼贊、國史辭典等)

### 誕生寺の沿革

誕生寺の創立に就ては、蓮門精舍舊詞三十三卷、長尾勝明の作陽誌中卷、勅傳御傳翼贊五十卷、

久米郡誌等の記事は必ずしも一定してゐないが、今これらの説を參考してその大要を述べてみたいと思ふ。まづ作陽誌の説によれば、法然上人が四十三歳の時に、親ら來つて兩親の墓に展し、一字を建て、ごちん析社山誕生寺と稱し、嚴父から傳へた阿彌陀如來を本尊とし、又自ら自像を刻んで、これを後昆に遺されたこと記されてある。所が寺傳に依れば、上人開宗の後つらく御兩親の事を思ひ、故郷を偲ばせ給ふ折から等身の自像を彫刻して、之を故郷に持參せんと思召されたが、殆んご其の暇もなかつたので、後に熊谷入道に托して之を贈り給ふた。そこで熊谷ははる／＼その木像を持參して、御兩親の御廟の前に草庵を結び、その尊像を安置したと傳へられてある。又勅傳の翼贊には、此寺はいづ誰人によつて建てられたかは明かでない。但し影堂の本尊は上人四十三歳の直形三尺の坐像木影で、熊谷入道が持參して安置し奉つたものであり、大師御自作の尊像であること傳へられてある。かの寺はかの入道の營建で、建久以後の草創であるかも知れないと記されてある。又蓮門精舍舊詞の説は、之は少し違つてゐるが、今何れが眞であるか、それを判定する

こゝは出来ない。

其後此の地の代々の領主等から幾多の寄附があつた様子で一時は中々盛んであつたやうであるが、永祿の頃兵火の爲に堂宇は盡く焼失して、全くその實情を知るこゝが出来なくなつた。所がその頃其地を領知せられた原田三河守貞佐が寄附せられた折紙が一通残つてゐる。其文に、御寺領先年の如く百石の都合立置候故者寺僧中而懈怠なき様相勤む可き事專要に候、右旨趣件の如し、弘治二年三月吉日、平朝臣原田三河守貞佐印、誕生寺方丈衆中記されてある。

而してその火災の後承祿五年三月二十二日から、堂宇再建の募財に着手し、同十二年三月二十六日に至つて始て上棟式が行はれた。其の領主は當寺の住持光天祐玉和上で、大檀主は原田三河守貞佐であつた。

其後備作の大守宇喜田直家、深く日蓮宗に歸依し、諸宗を殄滅して其宗を興さんとし、天正六年五月二十五日僧俗二百餘人を率ひてこの寺に來り、僧徒を逐ひ堂宇を毀ち、まさに御影堂に上らんとする時、或人潛かに尊像を負ふて山中に隠れ、以てその難を免れたと傳へられてある。同十年に直家死し、その嗣子秀家は石田三成に與みして關ヶ原に破れ後に八丈島に流されたから、當時の住持深譽上人は、今や全く時機の當來したのを知つて、藝洲の沙門以八上人、及び嚴島の運譽上人等の助力を得て、其の再興を企てられた。仍て先づ知恩院に至つて誠譽上人の贊同を得、次で綸命を蒙つて遂に舊觀に復するこゝが出来た。今の本堂は即ちそれである。

さてかの日蓮宗徒に依つて誕生寺が迫害された事情を一言述べておきたいと思ふ。そはかの御醍醐天皇の第六の皇子嵯峨大覺寺殿は大覺寺にましましたが、隨身の人々等に催がされて、嵐山で賊軍と戦ひ、敗北して山崎に逃れ、日蓮上人の高弟日像上人の所に隠れさせ給ふた。然るに大覺寺殿はもご眞言宗であつたが、日像上人の勧めによつて遂に日蓮宗に歸依せられ、名を大覺大上人と改め給ふた。その後勤王の士募集の爲に備前に至り勤王の士多田入道に會ひ、備前の各地を巡錫し給ふた。かくて備前は漸く日蓮宗が盛になり、金川の城主松田氏を始め、浦上宗景、宇喜多直家等も之

を信じ、遂に領内に令して改宗を迫り、若し従はざる者は之を追放するに至つた。かくて松田氏は豊樂寺を焼き、直家は佛教寺、清水寺等を焼いて改宗を迫つたが、獨り誕生寺の深譽はその命令に従はずして淨土宗を固守した爲に、天正六年五月廿五日、日蓮宗の徒二百餘人、一時に誕生寺に亂入して、堂宇を破壊したのである、これはまことに亂暴な行爲であつたが、その當時の事情としては、之をいかんともすることは出来なかつた。然しながら幸にして、宗祖の尊像の矢はれなかつたことは、不幸中の幸と言はねばならぬ。(作陽誌、久米郡誌、蓮門精舎舊詞、勅傳翼贊)

### 岩間山本山寺の傳説

法然上人の父時國公夫妻が子なきことを憂ひ、神佛に祈をかけたといふことに就ては四卷傳及び九卷傳にはさらに何等の記事もない。但し向稱寺琳阿の作に傳ふる九卷繪詞傳には左の記事がある。

「崇徳院の御宇に、父美作國久米の押領使漆間朝臣時國、母秦氏子なきことを憂へて、夫妻心をひきつにしてつねに佛神に祈る。妻の夢に剃刀を飲むを見てはらみぬ。夢みる所をもつて夫に語る。夫のいはく、汝がはらめる子さだめて男子にして一朝の戒師たるべき表事なりと、今より已來その母ひこへに佛法に歸して出胎の時にいたるまで、韋腥のものを食はず、長承二年四月七日午の正中におほへずして誕生するまじき二のはた天よりふる、奇異の瑞相なり、權化の再誕なり、見るもの掌を合はず」と。

又十六門記及び勅傳の記事もこれと殆んど同様である。所が此等の記事は神佛に祈をかけたといふのみで何處の神佛に祈つたが明了でないが秘傳鈔の上卷には、當國岩間の觀音様に祈をかけたと記されてある。又十卷傳には、菩提寺の觀音様に祈られたと書いてある。所が翼贊にも述べられてある通り、菩提寺といふ寺の所在が明かでないで、何處の菩提寺であるか明了でない。恐は高圓の菩提寺ではなからう。それゆへに古來岩間の觀音様に祈りをかけて法然上人を授かつたといふ傳説になつてゐる。仍てこゝに岩間寺の由來を記してみたいと思ふ。

岩間寺は誕生寺からは異に當て、その道程は五十町許り、その中途に龍燈の松といつて老松がある、この松はこの觀

音の御開帳のある度毎に必ず龍燈が懸つて輝いた爲に、俗に之を燎松と稱へたと傳へられてある。又一説に、時國夫妻祈願の時、常に龍燈が輝いたとも傳へられてある。

長尾勝明といふ人が著した校正作陽誌并に久米郡誌等の説に依るに、岩間山本山寺は初はこれを新山といひ役の行者の開いたもので、唐の鑑真和尚が興隆された名刹である。昔し役小角は曾てこの山に入り、久しく苦行した後に、伯耆大山に登られたと傳へられてある。天平勝寶六年に鑑真和尚が唐より來り大に教化を施して後、この山に來つて伽藍を建て新山の名を改めて本山寺と稱へた。本尊は聖觀音と十一面觀音が左右に並んで安置されてある。この觀音の由來は下の如くに傳へられてある。

昔、古道法師といふ人があつたが、まだ俗人であつた時には弓削師古と稱へた。曾てこの山に入つて薪を作らんとして切りに斧を下してゐたが、俄かに黒風四面より起り、山も裂けんとする霹靂であつた。師古は恐れ驚いて殆んど失神してしまつた。暫くにして風雨は止んだ。所が今伐つた木の株は、忽ち異様な光を發して、宛かも聖觀音、及び十一面觀音の姿に見へた。仍て師古は感嘆してついでに出家し、其の木材をもつて自ら二尊の御姿を彫刻した、それが現今の本尊である。

その後佐伯有賴といふ人があつたが、これは作州の鷹取氏の祖先である。若い時から獸獵を好み、一羽の名鷹を養つてゐた。或日この鷹が忽ち羈縲を脱して山中に遁れた。有賴愉快にして逐つて山中に入つた。日はさつぷり暮ればはて、草木怒號し、山鳴り谷震つて實に物凄しい光景となつた。その時鷹は羽を揃へて直下した。有賴直ちにそれを擒へんこしが、羽毛は忽ち寶劍となり、焰光赫々として眼目を奪つた。有賴驚怖し、地にひれ伏して願を起して曰く、吾れ平生に殺生を好む、是を以て佛陀靈異を示して我を導く、今迷妄を悟らざるば、いづくぞ覺地に到らんやとて、自ら頭髮を斷つて巖窟に入り、三七日の間苦修練行した。然るに一夕夢に寶劍が不動尊となつて下の如き偈文を有賴に授與さ

れた。鷹鳥變化不動劍、新化神冥寶體劍、衆生變易佛陀劍、舊成如來金色劍、六龍獻珠不動劍、國家擁護根本劍、六輪鉤牽佛法劍、諸佛成道涌出劍。こ。是に於て有賴は、興福寺の賴光法師を師として名を賴觀と改め、學成つて後にこの山に還り、その法統を嗣いだす傳へられてある。其後久米師眞といふ人も亦、靈瑞を感じて、出家して眞道法師と稱へ大に堂宇を興營し、盛んに法光を輝かした。其後名師相嗣いで、作州に於ける天台宗の唯一の名刹となつた。

以上は作陽誌等に載せられた傳説の概要である。その傳説は古來ありふれた諸寺諸山の傳説の如く甚だ奇怪の説ではあるが、然しまたその中に何等かのある眞理が含まれてゐるこゝにも注意を怠つてはならぬ。依つて兎も角之を記載するこゝ、した。(法然上人四卷傳、同九卷傳、同十卷傳、勅修御傳、作陽誌、久米郡誌)

**加茂神社** 誕生寺から餘り遠くない處に加茂神社がある。これは昔し仁明天皇の時法然上人の祖先源年(作陽誌には源元俊といふ)が美作國に配流されたが、年は京都に居られた時から常に下加茂神社を信仰されたので、この地に來て後も相變らず、この神を尊信された。所がたまくその附近に大穴牟知命を祀つた祠があつたので、年はこれを修營して加茂神社即ち玉依姬命を勸請し合祀して、加茂大明神と稱へたす傳へられてある。(作陽誌、久米郡誌、寺傳)

**御所屋敷** 傳記に依るに、時國公の御弟宅の跡は、誕生寺から東北に方つて二丁許り離れた處にあつて、土地の人々は之を御所屋敷と稱へてゐる。今の誕生寺は時國公の館のあつた下屋敷で、正しく上人の御聖誕の舊地であるを傳へられてゐる。(作陽誌、久米郡誌、寺傳)

**淨土院** この寺はも天台宗の寺で、時國公の館の門前にあつたのであるが、後に今の處に移轉した。故に今その淨土院の跡は誕生寺の門前にあつて田疇となつてゐる。但し上人御誕生當時は此處に竹本院と淨土院との二院があつて淨土院には毘首羯摩の作と傳ふる御長三尺の釋尊の像が本尊とされてあつたが、かの誕生寺建立の時に、本尊と共に院主も誕生寺に移住されたので、淨土院は遂に無くなつた。然しその院主の名及び事蹟等は今知るこゝは出來ない。(作陽誌、久米郡誌、蓮門精舎舊詞)